

岩井俊雄アーカイブ&リサーチ

特定非営利活動法人コミュニティデザイン協議会

概要／課題

近年は絵本作家としても知られるメディアアーティスト岩井俊雄は、1980年代半ば以降、アートにとどまらず、テレビ番組、ゲーム、CGアニメーション、電子楽器の制作など幅広く活動し、文化庁が推進する「メディア芸術」の領域を横断する国際的に評価の高いアーティストである。しかし、岩井の作品や関連する資料は、これまで劣化の一途を辿っている。それらの整理・修復とデジタル化を進め、広く公開することによって、作品の再制作や再評価へつなげることは、次世代の創造活動とメディア芸術領域の発展を促すと考えられる。

体制／手法

岩井俊雄と明貫紘子（映像ワークショップ合同会社代表）が共同で、2021年に立ち上げたプロジェクト「岩井俊雄アーカイブ&リサーチ」をベースにして、5カ年計画（2021-2025年）で実施することを予定している。本事業では、基本的に岩井が個人的に保管する資料を扱う。エンジニアやプログラマーなど専門家のアドバイスをもらいながら、作品の再制作のための技術的なガイドラインを作成していく。全体の事業管理は、特定非営利活動法人コミュニティデザイン協議会が担当する。

成果

（成果物）

- 作品《映像装置としてのピアノ》（1995年）再制作
- 作品《映像装置としてのピアノ》に関する作家インタビュー映像
- 映像作品および記録映像のリスト（サムネイル画像付）
- 映像作品および記録映像のデジタルファイル
- 活動年表（1981-2022年）
- 作品目録（1981-2022年）



（左）《映像装置としてのピアノ》設営風景（右）展示風景 画像提供：岩井俊雄

（公開方法）

- 再制作版《映像装置としてのピアノ》が個展「どっちがどっち？いわいとしおX岩井俊雄 100かいだてのいえとメディアアートの世界」（茨城県近代美術館、2022年7月2日～9月19日）において、関連資料とともに公開された。
- 《映像装置としてのピアノ》をめぐって、オリジナルと再制作版それぞれの制作プロセスを関連資料や技術背景とともに振り返るオンライン・トークイベントを2023年2月23日実施。

（課題）

- アナログビデオのデジタル化にあたり、想像以上に劣化が進んでおり、想定をはるかに上回る費用がかかることが分かった。
- プログラミングのアップデート作業は作家本人しかできない箇所が想定されるため、後世に伝えていくためにどうすればよいか検討する必要がある。
- 《映像装置としてのピアノ》の再制作にはソフトウェアのアップデートが必要であったが、作家本人が保存していたコンピュータ上に当時の開発環境とソースコードが残っていたおかげで、スムーズに実施することができた。しかし、将来的に開発環境の維持に関する課題が残る。

（文化的・社会的・経済的な意義）

- 同様なメディアアート作品の保存問題の対処方法について事例を示すことができた。
- 過去のメディアアート作品に対する再評価の機運を高めることができた。